校長室だより～燦燦～ №３４

結縁・尊縁・随縁

2020.1.6

昨年、１１月２９日に中曽根康弘元首相が亡くなった。１０１歳だった。およそ２日間にわたりテレビや新聞等で中曽根元首相の功績などが紹介されていた。

だいぶ昔のことになるが、佐藤栄作首相の後継の座を「三角大福中」で争ったことがある。三木武夫元首相、田中角栄元首相、大平正芳元首相、福田赳夫元首相、中曽根康弘元首相の５人である。まだ私は小学生だったが、ちょうど政治というものに興味が湧いてきた頃だった。いや正確にいうと政治家に興味があった。人物に興味があったのである。５名の方それぞれに個性があった。持ち味があった。どなたも政治家らしい政治家である。この頃の私は、組閣があると、新しい内閣のメンバーを一人一人確認していた。そんな小学生だった。

私にとって一番魅力的だったのが田中角栄元首相である。数年前に石原慎太郎元都知事が『天才』という本を出版した。天才とは田中角栄元首相のことである。本と言っても文庫本や新書以外は滅多に買わない私だが『天才』は迷わず買ってしまった。そして、一気に読んだ。おもしろかった。田中角栄という人ほど魅力的な政治家はなかなかいないだろう。もうこれからは出てこないタイプである。出にくい世の中になったというべきか。

次に名前を挙げたいのが中曽根康弘元首相である。私の記憶では、長きにわたり政権の座にあった。戦後５番目の長期政権だったそうである。もっと長いような気がしていた。現在の安倍政権は戦後最長である。意外である。たぶん中曽根元首相の頃は政治をやっていたのである。だから印象が強く記憶に残っているのだと思う。政治家としてやろうとしていることが明確だった。信念があった。蓮舫さんが言っていた。「信念がなかったら野党なんてやっていられない」

１１月３０日のテレビで中曽根元首相の功績が紹介されていた。すると、「結縁・尊縁・随縁」という言葉が出てきた。私はすぐに反応した。

結縁　　縁を結び
尊縁　　縁を尊び
随縁　　縁に随う

日ごろから、そして今まで“縁”によって生かされてきた私である。これはいい言葉だと思わず膝を叩いた。さすがは中曽根元首相である。一流の人は違う。縁を結ぶだけでなく、縁を尊ぶ。そして縁に随う。見事に縁を説明してくれている。きっと縁を尊び縁に随わなければ、その人にとっての縁にはならないのだろうと思う。要は縁を結んだときのその人の心の持ちようである。

若い頃は、もしかしたら縁を尊ぶことをしてこなかったかもしれない。縁に随う気などなかったかもしれない。しかし、３０歳も半ばを迎える頃になると、ようやく縁に気づくようになる。出会いが出会いで終わらずに縁となる。そして、気がつくと縁に随って生きている。

高校生には、これからたくさんの出会いが待っている。その中には、きっと縁となるものもある。自分の目の前に現れた人は、その人にとって意味のある人である。決して偶然ではない。必然である。そう思ったほうがよい。人生に無駄なことなどない。必ず意味がある。ただ、そのときはそのことに気づかないかもしれない。後になってからわかるかもしれない。大事なものほど見えないし、そのときは気づかないものである。「結縁・尊縁・随縁」令和２年、２０２０年の年頭に当たり、心に留めておきたい言葉である。